

後悔に三つあり

千葉の県人 鎌田 留吉

「後悔に二つあり。是を心得べし。高下の節、今五、六日待つ時は、十分取るべき利の勝ちを急ぎ、二、三分取り逃し候後悔、是は笑うて仕舞う後悔なり。又七、八分利運の米、欲に迷い仕舞いかね候間、引下げ、損出る後悔、是苦勞致し候上の後悔なり。慎み心得べきことなり。」(本間宗久)

40年近く何万回かの売り買いをしてきた私は、恐らく普通の人よりは後悔をしない人間になっていると思われる。それは私が明日のことは解らないと骨身に沁みているからであり、肝に銘じているからである。したがってその瞬間、瞬間にできる限りのことを比較考量して、出した結論はそのときではベストであったと思うようにしているからでもある。結果論を言うことはたやすい。よく「株式投資なんか簡単だよ」と過去の罫線を見ながら言うひとがいる。「ここで買って、ここで売ればいいのだ」。そのときは、もっと下がるかもしれないと思うから買えない。もっと上がるかもしれないと思うから売れないのが株ではないか。

その私の目から見ると、後悔に三つあるように思う。それは欲が深すぎて、あらゆることを後悔する人の後悔である。買った株が翌日少し上がるともっと買っておけばよかったと思ひ。小耳に挿んで結局買わなかった株が上がると、買っておけば良かったと自分を攻める。そして利がでて売却した株が上がると「もっと長く待っていれば良かったのに！あ〜！バカ！バカ！」と自殺したくなる。人が儲けている話を耳にすると、地団駄を踏んで悔しがらる。あらゆることを後悔するということは、自分から求めて心の中に不幸を醸成させていることである。こんな人に運氣が巡って来る筈がないではないか？あらゆることに後悔する人は強欲であるから、あらゆるチャンス(?)で儲けてやろうと考えているため、良く調べもせず、人の話にすぐ飛び乗り、少しでも下がると不安になり、少しの儲けで売却する。また、下がったままだと、あの人に騙されたと恨む。しかし、こんな強欲の人でも後悔しないことがある。少し損がでると、もう損切りできず、塩漬けにして見なくなる。見なければ損をしないと思っているのだ。「売らなきゃ損は出ないんだ？」(もう、出てるって!!)何かの機会に値段を確認すると「え〜！こんなにやられてるの！孫の代にはあがるでしょ？」と独身の癖に極めて前向きなようなことを言う。

明日のことは解らないと常に言い聞かせ、罫線も勉強し、世界経済の状況に関心を持ち、その銘柄の長短を研究し、株価位置を頭に置いて、売り、買いを決定すること。

それにしても、売りのタイミングは難しい。「売る、買う、休む」というのが相場格言だ。買った銘柄が上がる確率は五分と五分。だとすると損はできるだけ少なく、利益はできるだけ伸ばしたい。そのためには、買値から5%下がったら投げ、高値から10%(?)位(?)下がったら利食うと機械的に行動することが良いのかもしれない。 2014.9.14 記